

として読むことも可能である。けれども、そういうことが可能であるということ自体に、先にふれたようなこの書物の構成上の問題があるともいえるであろう。

先にこの書物の表題の曖昧さに一言ふれたが、その曖昧さも、曖昧さをといた Introduction における意図の説明も、実は著者の pro-Marxism 的立場を塗糊しているのであつて、最終章で著者は次のように書いている。「マルキシズムが『すべての解決』を与えるなどという意図はないけれども、マルキシズムはアメリカ国民に一つの未来をさしのべている a consistent

and documented theory ではある。」もちろん、著者の解釈、とくに、実存主義の史的展望に対しては異なる立場からの強い反論が可能であろうし、彼の作品解釈に反駁することももとより不可能ではない。だが、反論はそれなりに結構なことなのであつて、むしろ私がおそれるのは、著者の立場に対する反感からこの書物自体が無視されることである。現代アメリカ文学についてさまざまな見方が可能である以上、興味ある分析と解釈を提出したこの書物を閉め出す理由はどこにもないのである。(同志社大学文学部助教授)

### *The Plays of Eugene O'Neill.*

By John H. Raleigh. Carbondale, Ill. : Southern Illinois University Press, 1965.

### *Trouble in the Flesh.*

By Max Wylie. Garden City, N. Y. : Doubleday & Company, Inc., 1959.

近 田 小 一

本誌前号(2号, March 1965)に最近までの O'Neill に関する書誌の紹介があったが、以後更に O'Neill に関する研究は盛んで、書物になったものだけでも次の多くを算える事ができる。

O'Neill の作品では

*Ten 'Lost' Plays*, foreword by Bennett Cerf  
(Random House, N. Y., 1964).

研究書では

- 1) Frederic I. Carpenter, *Eugene O'Neill*  
("Twayne's United States Authors Series"  
TUSAS 66. Coll. & Univ. Press, New Haven,  
1964).
- 2) John Gassner (ed.), *O'Neill, A Collection of  
Critical Essays* (Prentice-Hall, New Jersey,  
1964).
- 3) John Gassner, *Eugene O'Neill* (University  
of Minnesota Pamphlets on American Writers,  
Univ. of Minn. Press, Minneapolis, 1965).
- 4) John H. Raleigh, *The Plays of Eugene O'Neill*  
("Crosscurrents Modern Critiques," Southern  
Illinois Univ. Press, 1965).

更にフランス語訳全集が目下進行中 (*Théâtre Complet*, L'arche) で現在 tome V までが刊行されており、又1931年に出版された O'Neill についての最初の

書誌が再刊された (Sanborn, R. & Clark, B. H., *A Bibliography of the Works of Eugene O'Neill*, B. Blom, 1965) 事を付記しておく。

此所ではその内 Raleigh のものを論評し、又すでに前号で書名のみ掲げてあった Max Wylie の小説についてやや詳しく紹介しておく。

× × ×

John H. Raleigh の *The Plays of Eugene O'Neill* は全く斬新な構想による研究である。著者は演劇批評家ではなく、かって Matthew Arnold の研究をアメリカ文化と関連づけて行った業績もあるように、文学的研究に従事する学者で現在 University of California で教えている。その視野はアメリカ文学のみならず広くアメリカ文化全域にわたっている。本書はそうした独特な perspective による研究成果の一つとして考えられる。

本書の著しい特色は O'Neill を何より "American writer" として捉えようとしていることである。著者は同時代の作家のみならず19世紀の主要なアメリカ作家、思想家と対比し、彼の特質をアメリカ文学の潮流の中で位置づけ、又一方では O'Neill 劇の複雑な諸相を個々の作品を通して観察分析する。そして O'Neill の全作品が独特な O'Neill 劇の世界——著者にいわせれば one great organic whole——を構成しているこ

とを指摘する。

著者は次のように論旨を展開する。第一章 Cosmology and Geography では、O'Neill の世界観を概述し、第二章 History では著者のいわゆる O'Neill の “history play” をとりあげ、第三章 The Form で劇的構成と言語的表現を考察し、最終章 O'Neill as an American Writer で O'Neill 劇の特質を要約する。第一章から第四章までは O'Neill 劇の発展の跡を内容、形態両面にわたって追究し、*Long Day's Journey into Night* (1941) が最高の到達点であることを著者は綿密明快に論証する。もっとも著者独特の「進化論」的な観方からすれば〔Introduction〕にあるような、O'Neill 劇全体を完全な円とし、個々の作品はその円に打込まれた楔である、とする比喻には疑問がある。むしろ *Long Day's Journey* を頂点とする漸昇線とみなすべきではないか。

著者はその独特な作品分類の体系で個々の劇にさまざまな呼称を与えて特徴を明らかにしようと試みる。第二章での “historical exotics” (*The Fountain*, *Marco Millions* 等), “New England play” (*Desire Under the Elms*, *Mourning Becomes Electra* 等), “memory play” (*Ah, Wilderness!*, *Long Day's Journey into Night* 等) がそうであり、こうしたとり扱いは、第三章の “racial play” (*The Emperor Jones*, *All God's Chillun Got Wings* 等), 第四章 “revenge play” (*The Rope*, *Mourning Becomes Electra*, *The Great God Brown* 等) といった規定に及んでいる。こうして O'Neill 劇の諸様相がスペクトルのように鮮明に解明される。だがここに同時に限界が生まれていることを無視できない。たとえば *All God's Chillun Got Wings* では白人と黒人の相剋に焦点が当てられる結果、O'Neill が意図する metaphysical な意味——E. A. Engel はそれを破滅する “人間” の浄化と安らぎにみられる神の恩寵に見出している (*The Haunted Heroes of Eugene O'Neill*, Harvard Univ. Press, 1953; p.125)——が没却されてしまう。*Desire Under the Elms* では New England を舞台とする O'Neill 劇の特徴の一つであるピューリタンの抑圧と人間本能の相剋を論じ、「主人公達のたどる道は死である」ことを指摘するが、終局で Eben と Abbie が経験する、死の家を逃れて新しい生命に息づく “人間” の浄化と至福に論及がない。“revenge play” ではその感がさらに強い。本書では O'Neill 劇の内面的世界特に、登場人物一般の心理的な局面に照明が当てられていな

い。*Strange Interlude* や *Mourning Becomes Electra* に限らず O'Neill の世界は、肉親の相剋、人間内部の分裂、原始的過去への退行等 Freud や Jung の影響が濃厚に見られる。こうした特質の深層に本書の観察はとどいていない。このことは、O'Neill 劇の重要な技法である表現主義——*The Emperor Jones* や *The Hairy Ape* にとりわけ顕著である——についての考察がないことと共に惜しまれる点である。

著者は O'Neill を “the greatest American dramatist” として考察するとき、今世紀及び19世紀の主要なアメリカ作家と対照し、その文化的伝統の中にとらえようとする。こういう視点からの O'Neill 劇の究明は E. A. Engel が20世紀作家との関連ですでに *The Haunted Heroes of Eugene O'Neill* (前掲書) の中で行っているが、アメリカ文学のほとんど全般にわたる視野に立つ試みは Raleigh の本書を恐らく嚆矢とすべきであろう。関連づけの対象とし20世紀作家では London, Lardner, Hemmingway, Steinbeck, Faulkner 等が、19世紀では Poe, Whitman, Thoreau, Hawthorne, Mark Twain, Henry James 等が、それぞれ登場するが、対照してどこか似ている一面を挙げるにとどまり、羅列的総花的であってアメリカ作家としての O'Neill の、求められるべき “イメージ” がかえってこのため消散してしまっている。この程度の類似点や関係は、アメリカ作家同志にかぎらず、恐らく他国間のどんな二人の作家、芸術家を取り上げても見出せるのではないかという疑問をわれわれに抱かせる。

注目すべき論証は著者が最も力点を置いて詳説する Henry Adams, Herman Melville, Ralph W. Emerson との対照である。まず Adams との場合は著者の指摘する通り、その *Education* における “Dynamo” に対する主想と O'Neill の *Dynamo* の観念は、宇宙の力の根源のイメージ “dynamo” への讃仰において結びついている。動機はそれぞれ別として両作家はともに宇宙の “根源力” への探究の過程としてここに創造力の根因を、永遠の科学的物質の大聖母像に見出すのである。しかし O'Neill に関する限りその後の作品で再びこの “scientific mother symbol” を求めることはない。Raleigh はこの永遠の巨大な自然力への探求を “a modern version of the ancient Promethean myth” (p. 248) としてアメリカ人に特徴的なものとしているが、“dynamo” はむしろ一人に限らず巨大な科学的エネルギーを創り出しながらそれに圧倒されつつある “現代人” の共通問題につながるものとされ

るべきであろう。Melville では著者は *Moby Dick* が O'Neill の 'Ile と人物、状況、行動のパターンが酷似しともに海洋作家であるという面で両者の関連性を論じる。事実 O'Neill が海と深いつながりを持っていることその劇は背景のみならず主想や筋の展開を“海”に求めていることは重要な論点となりうる。しかし海が主役を演ずるのは Raleigh 自身が比較的価値を認めない主として初期の作品である。両者の関連は部分的であり、多分に状況的な相似の指摘以上のものは認め難い。Melville との限定された近縁性を証するとしてもアメリカ作家としての O'Neill を特徴づけるのに十分ではない。Emerson の場合は彼の “darker, more solipsistic, pessimistic, skeptical side”(p. 259) と O'Neill の世界を対比する。“god” や “death” を keynote として含む似通った表現の passage が対応されるが、Emerson の transcendental god と O'Neill の god the father は極めて異質的な観念であり、前者の Nature の大法則下の “death” と後者の Iceman 的 “death” についてもまた同じである。勿論両者には pessimism や E. A. Engel も指摘する pagan naturalism (前掲書p.82) 等々様相を等しくする局面を無視できないが、ここでは表現上の類似点以上に探索が行われていない。上記三人の作家との関連づけでわれわれが見出すものは、O'Neill の世界の何らかの局面が、これら重要なアメリカ作家の世界のある局面とそれぞれ類似した関係にあるという指摘の列挙であって、O'Neill のそうした局面がアメリカ作家としてのどんな特徴を持っているかについての解明ではない。われわれにとってこういう観点からの O'Neill 研究に他のアプローチがないわけではない。A. H. Quinn が指摘している Poe と O'Neill との近縁点 (*Edgar Allan Poe*, Appleton, 1941, p. 392) も一つの手がかりとなるであろうし、Raleigh 自身も名前だけ触れている William Vaughn Moody (1869-1910) やその他のアメリカ演劇の先人達の活動を改めて見直してみるのも一つの道といえるのではないか。

著者はさらに進んで O'Neill 劇の総合的な評価をアメリカ文化の視点から試みる。まずアメリカ文化の特徴を四つの要素に見出す。それは「無限の自由と可能性」と「孤独な人間の無力感」の両極から生ずるアメリカの意識の型 ① chance ② mutability ③ pantheism ④ determinism とする。彼はこれらの要素を O'Neill 演劇の総合であり極点である *Long Day's Journey into Night* で結合させる。この四つの特徴

を四人の登場人物に次のように対応させるのである。

luck (James); mutability (Jamie); pantheism (Edmund); determinism (Mary)。評者の破綻はこの時生ずる。James, Jamie, Mary の場合は理解できようが、この劇で誰よりも重要な人物、作者自身に外ならない Edmund の自己否定の世界 (“It was a great mistake, my being born a man, I would have been more successful as a sea-gull or a fish……” 最終幕) は、死—自己の否定—以外に信依できるものは存在しない世界である。それはこの劇を特徴づける完全な “拒否の世界” であって、pantheistic なものと考えすることは不可能である。精緻で截然たる著者の論理はまさにその終結においてわれわれを困迷に陥れる。これは著者が “American writer” としての O'Neill をひたすら追求するあまりに、論理の筋を余りにも整然と——mechanical とも思える程に——通そうと努めたことに因るものといえよう。

しかし本書に描かれた O'Neill 研究の独特な構図の価値は、そうしたつまずきのために大きく割引かれるものではない。その観点のユニークさにおいて、その視野の広さにおいて、今後の O'Neill 研究のために新しい道を切り開いた野心的な探索とみるべきであろう。A. S. Downer が力説するようにアメリカ演劇の巨星 O'Neill は “自然発火” によって忽然と生み出されたのではない。 (*A Time of Harvest, American Century Series*, 1962, pp. 44-45)。O'Neill 演劇は何よりもアメリカ社会とその文化の深い土壌から発芽し生長したものである。本書の研究は反面こうした認識を体系化し結実させることが如何に困難であるかを如実に示すものである。読者は本書によって今日までの数ある O'Neill 研究書の提示するうちでも最も興味深い世界に導かれるであろうが、彼がそこに見出すものは O'Neill 研究の終着点ではなく、新たな出発点の道標であろう。

Max Wylie, *Tronble the Flesh*.

Eugene O'Neill の死後十余年間に発表された、彼の研究、伝記のたぐいは非常に数多いが、ここにとりあげる Max Wylie のものは、O'Neill をモデルにした小説であるという点で特殊の興味をそそる。作者は「本書の登場人物はすべて架空のものであって、現存の人、故人であるとをとわず、誰か実在の人物に似ていてもそれは全く偶然の符合でしかない。」と断ってはいるが、これは、O'Neill をモデルにしていることをさらに印象づける以外のものではない。

この小説がユニークであるのは素材の点ばかりでなく、そのとりあげ方である。伝記的事実を大きくとり入れながら、作者独自の視点より、Jordan Miller のいわゆる“distortion”がなされ、O'Neill という人に新しい照明が当てられている。ここには今までわれわれ O'Neillian が見慣れていたものとはいささか異なる、新しい人物像が浮き彫りにされている。作者は小説や劇の外に伝記も手がけてきたが、この長篇には彼の文学的な抱負とともに、劇作家 O'Neill に対する並々ならぬ執着と探索の跡がみられる。

まずこの作品がとり扱っている時期が興味深い。Eugene O'Neill(作中名 Seton Farrier. 以下同じ)が彼の二番目の妻 Agnes Boulton (Jill) とともに無名作家として Cape Cod の Provincetown に暮らしていた 1919 年頃にはじまり、夫妻の第二子 Oona (Dermod) が生まれた少し後(1925年頃)で終わっている。この間に O'Neill の生涯でも劇的な出来事が起きる。それは彼の長篇第一作である *Beyond the Horizon* の Broadway 初演 (1920年) の成功である。これがアメリカ演劇に与えた歴史的な意義は改めて述べる要はない。他の伝記作品との関連からみても、Agnesの回想記 *Part of A Long Story*(1958)は第一子Shaneの生まれた1919年までにわたっており、さらに Doris Alexander の *The Tempering of Eugene O' Neill*(1962) も一流の劇作家として名を成すまでの生い立ちを扱っているが、これらと時期を接して、この場合は小説の世界に主人公として O'Neill を登場させているので、われわれは一層ひきつけられる。興味ある点は他にもある。それは妻 Jill なる女性を通して主人公を観察し批判させていることである。前記二作の伝記類も女性の手になっており、他にも O'Neill の研究や論説の著者に女性が少くないのは O'Neill その人に、あるいはその作品に、女性の関心を強く索く、女性の洞察が入りやすい何かがあるのであろうか? こうした疑問の解明は他稿にゆずるにしても、Seton Farrier の内面を解剖し、それを白日の下に曝そうと試みる作者は Jill を最大限に活かすことによって、かなり大きい利点を得ているようにみえる。

登場人物は内気で短気な自我中心的な芸術家 Seton Farrier と辛棒強く控え目で没我的な妻 Jill を中心に父 Dermod (James) 母 Molly (Ella Quinlan) 兄 Pat (“Jamie”) 等すべて伝記的事実にかなり即しており、彼等の相互関係の基底もまた同じである。

作中起る一連の出来事を次のように発生順に(伝記的事実と対応して) 見ればここにも同じことが指摘で

きよう。

Provincetownでの生活—長編第一作 *Rim of Chances* の Broadway 上演成功 (*Beyond the Horizon*, 1920)—父 Dermod の死亡 (James, 1920)—Connecticut の田舎の邸宅 “Glenn Lochen” を購入し移転 (同州 Ridgefield の “Brook Farm”, 1922)—兄 Pat 死亡 (“Jamie”, 1923)—Lake Placid の cottage に一家が滞在 (Bermuda へ, 1924)—第二子 Derek 誕生 (Oona, 1925)—母 Molly 死亡 (Ella, 1922)。

もちろん注目すべき相違点はある。その一つは母 Molly の死亡の時期を兄 Pat の死後に配したことで、それによって Pat の死因が母に対する異常な愛着と結びつかなくなっている。つまり彼の死は多くの伝記が指摘する、母なき後生きる よすがをすべて失った Jamie のそれではない。

こうした点からもわれわれの注目をひく要所を本書は少なからず示すが、とりわけ作中決定的な出来事である *Rim of Chances* の初演成功直後に、Farrier 父子が対面する場面は、読者の注目を凝集させるところである(第四部(15))。

Seton は Jill を伴って、父 Dermod を訪ねて行く。Dermod は涙を流さんばかりに興奮している。

Dermod took a long tormented look at his tall son, opened his arms, and walked across the living room. He held him for a long time. Seton was flustered. It was something that had never happened. The old man was shaking with sobs but no word came from him.... (p. 249)

人間の感情が最もあからさまに表われ出る、人生の感激的な瞬間であるが、父の手放しの喜びに反して子はかってなかったような“ろうばい”を見せるだけである。そればかりか、泣きむせぶ老人を後に彼はやがて黙って立ち去ってしまう。この小説に関する限り、彼のこうした態度は自我中心的な芸術家の、周囲の人々に対する冷淡さと傲慢さから出ているものと受けとられる。だがモデルである O'Neill 家の人々との関連でこの場面を見る時、これは余りにも平板な父子の対面図であると言わずにはおれない。O'Neill が父 James に対して根深いエディポス的対立感情を抱いており、これが彼の行動の主要な動機にしばしばなっていたことは多くの伝記が一致して指摘するところである。そして有名俳優である父 James もまた Broadway での成功までは息子を信用せず、“no good drunken bum”として厄介視していたことも広く知られている。この

老父は *Beyond the Horizon* 成功の光景を目のあたりに見ながら、その本当の意味するところが判らなかつた。彼は幕が降りてから流を流しながら息子の肩をたたいて言う。「お前はお客に家に帰って自殺させようとしているのかい。」(Arthur & Barbara Gelb, *O'Neill*, p. 408.) O'Neill が今や新しいアメリカ演劇の担い手となったことは、同時に彼にとって、古い Broadway の栄光の象徴であった父 James に対する復讐を意味するものであったことは、その伝記や研究書が明らかにしている。こういう心理的な根深い確執を背景にして父子が対面するならば、そこにはもっと陰影に富んだ場面が見られたことであろう。子の側では少くとも単に、“ろうばい”するだけではなかつたはずである。作中人間関係の劇的な描出という点でこの場は *Trouble in the Flesh* の中で屈指の見せ場であったはずであるが、作者はここで fiction の持つ特権を自由に行使していないように思われる。

実は作者にとってわれわれのこうした注文自体無理なことであろう。彼の設定したこの場は作品構成のいわば必然的な展開なのである。ここでわれわれは主人公 Seton の性格づけに目を移さねばならなくなる。彼は世間的な関心や責任を一切拒否して己れひとりの世界に生きる人間でありながら反面いつどこにあって母性的な女性の庇護を必要とする neurotic な性格である。こうした性格を形づくった原因は作中 Farrier 家の過去を知る父の友人と二人の医師との対話によって明らかにされる。

“... (Molly) was a morphine addict.”

Both the doctors gasped. “At the time Seton was born?”

“Yes. By then her addiction was desolating. Incurable they thought. She was not an addict at the time Patrick was born ten years earlier, though that is when she began using morphine.”

“Used it all during her pregnancy with Seton?”

“Yes...”

“It means... that Seton was himself delivered into this world a drug addict.... This could have no other effect but to destroy him....”

(pp. 409-410.)

Seton は生まれつきの異常性格者、不可避免的な破滅の宿命を負う犠牲者なのである。そしてこの契機は兄 Pat の出産にさかのぼって見出される。だがこれは現在われわれわれが手にしている諸伝記が伝えるとこ

ろとは大きく相違する。たとえば Gelb 夫妻の大著 *O'Neill* は「Eugene は医師の記録から確定できる限り正常で健康で母乳で育てた赤子であった。この子を生んだことがその母にはっきりと衰弱させる影響を及ぼしたにもかかわらず——。」(Herpers, p. 58.) と述べ、Ella の麻薬中毒が、外ならぬ Eugene の出産を契機として起ったことを示しているし、自伝的要素が最も大きいとされる O'Neill の作品 *Long Day's Journey into Night* (1941) でも母 Mary (Ella) は次のように告白する。「……Edmund (Eugene)を生んでとうとうがっくりきたのです。それから後ひどく悪くなったのです。そして安ホテルのあの無知なやぶ医者——あれが知っていたのは私に苦痛があったことだけ。私の苦痛を止めるのはたやすいことだったので。」(Jonathan Cape, p. 75)

もっとも彼女の中毒の契機については多少の異説がないわけではない。Doris Alexander は、すでに触れた *The Tempering of Eugene O'Neill* で、Eugene が生まれる前年の1887年に彼女は乳ガンの手術を受けたりした苦痛を逃れるために医者から与えられたモルフィネがその発端となったと述べている。(Harcourt, Brace & World, p. 14.) だがここでも Eugene が先天的に麻薬中毒体質としてこの世に出たことは証されていない。いずれにしても Seton Farrier はこの点で全く新しい人物といえる。

彼を破滅へと導いていくものは、いわば“物理的必然”であって“人間の宿命”ではない。そこにあるのは、まさに“*Trouble in the Flesh*”であって“魂の苦悶”ではないのである。彼の行動が如何に悲惨であってもそれは悲劇的になりえず、他の人間とのからみあい平板単調になっているのも、その根源はここに見出せよう。これは特に O'Neill のような心理に病的な暗い“かげり”を持つ人物を描写の対象とするときは致命的な欠陥となる。

だがモデルである O'Neill その人をつくりあげた要素について作者がとったこうした視点は、あながち否定されるものではない。O'Neill 自身も、後年悩んだパーキンソン氏病についてそれが母方からきたらしい遺伝的な神経病であると信じており、医師は彼がそれを自分の宿命の一部だと感じとっていたことを認めたことが報ぜられている。(Croswell Bowen, *The Curse of the Misbegotten*, p. 359.) O'Neill の個性をつくりあげた要因としては、彼より二世代前にさかのぼる家代々のさまざまな病的欠陥が作用していることを彼

の多くの伝記類が示唆しているが、その真因をとらえることは今後とも容易ではないであろう。ここで Max Wylie は彼独自の極めて明快な観点からこの作家の個性形成の秘密を提示しているのである。だがこうして生まれた Seton Farrier は Eugene O'Neill の外貌を持ちながら、実は別人というほかない。作者は自ら創造したこの人物を解剖し究明し、白日の下にその正体を曝そうとする。本書は、彼の一貫したその努力の集積である。Seton はこうして、救いがたい、自我中心の“Monster”として宜明され、また彼にかしづいた妻 Jill は最後に完全な絶望に崩折れる。

作者は Seton Farrier の観察を通じて次のような結論を提示していることが認められる。

- ① 芸術家の内にある欠陥や弱点そのものが芸術を創造させる力としてはたらいっていること。

② 天才は自分より劣った正常な人々の奉仕と犠牲の上に立ってその偉大な才能を發揮できること。この考察は O'Neill についての伝記的事実や観察と興味ある一致を見せる。とりわけ Agnes Boulton が *Part of A Long Story* (前掲) で回想している彼との10年間の生活がこれを如実に示唆しているといえよう。

Eugene O'Neill の、異様ではあるが丹精込めた一種の“肖像画”としてこの作品は、彼についての老大な作品研究や伝記類の外縁にその独特な地位を占めるものといえるであろう。*Trouble in the Flesh* は大方の批評家によって認められているように、小説としてそれ自体異常な迫力をもって読者を素きつけるが、特に O'Neill の研究者にとって甚だ興味ある示唆を含んだ作品である。(同志社大学工学部専任講師)

## *Occasions and Protest.*

By John Dos Passos. Chicago: Henry Regnery Company, 1964.

### 千 葉 哲 郎

この本は1936年から1964年にわたる約30年間に発表された文章を集めたものである。

I. Certain Fundamentals, II. The Leaders and the Led, III. That Something More than Common の三部からなり24の論文や随想がおさまられている。第I部では、Dos Passos の作家としての面目、自由の必要、芸術家としての自己の形成の背景、Jefferson 式自由人の尊厳を護るための現実批判、などが論じられ、いずれも著者の創作の秘密にふれるものばかりである。第II部は、題目の通り指導する者と指導される者間の問題点の追求であり、要職にある人物との面談を通して得られたことを小説風の書き方で示している。第I部と第III部で論じられる内容の、生きた人物を通じた実証的政治・社会分析と批判、といえよう。第III部は、第I部の論調に通じるもので、正しい現実認識の必要と、現代の産業社会に君臨する官僚主義的権力に抑圧された個人の自由の擁護を激しく説いている。

はじめから一冊の本にするように書かれたのではないので、中には編集上かなり無理な組み合わせがなされている文もある。ソビエト連邦の不自由、イギリスの不自由と並んでアメリカの不自由を強く批判した著

者の中にも、今日のアメリカに対する誇りと建国当初のアメリカ人の個人の自由への意志が共存していることを、編集者は、この本の冒頭を愛国的な‘The American Cause’で飾り、結尾を‘Lincoln and His Almost Chosen People’でしめくくことで示している。Dos Passos は、人間を愛し、アメリカを愛するが故に、建国当初のアメリカ精神をふみにじる如何なる政治社会の権力をも憎んだのである。アメリカの南部を憎みかつ愛した William Faulkner と極めて良い対照をなすものといえよう。同時代のアメリカの巨匠であるこの二人の作家は、一方が政治的情熟を注いで現実の悪条件をはぎ取ろうとした行動派であるのに対し、他方は静観の中に人間の罪悪の根源をみたという相違をふまえながら、究極的には無垢と素朴を愛するアメリカ人であるという共通点をもつことがうかがえる。逆にいえば、二人共、文明憎悪のアメリカ人であったといえる。ここで浮かび上がってくるのが、第I部の三番目に置かれた‘The Harvard Afterglow’である。これは著者の Harvard 在学中の恩師の思い出話である。在学中、Dos Passos は Dean Briggs の古めかしさが鼻もぢならないものであると感じていたが、卒業後20年して“古めかしい紳士の道徳的清純